

「そうだ」と学生は思いに沈んでつぶやいた。「いつかこの世にペリシテ人^{びと}やアマレク人^{びと}が生きていて、戦さをしたり、重きをなしたりしていたのに、いまでは彼らは跡かたもなくなっている。いずれはわれわれだってそのとおりになってしまうんだ。いま僕らは鉄道を敷設して、こんなふうにはたずんで、哲学議論をしたりしているが、それこそ二千年もすれば、この土手だって、はげしい労働で今ごろはぐっすり寝こんでいるあらゆる人だって、塵さえ残らぬでしょうからね。じっさい、これは恐ろしいことですよ！」

「そういう考えは捨てなくちゃなりませんね……」と技師がきまじめに、さとすように言った。

「どうしてです」

「どうしてって……。そういう考えをもって、人は人生を終るべきであって、出発するべきではないからです。そういう思想をいただくには君はまだ若すぎますよ」

「そりゃまたどうしてです」

「そういった無常だとか無だとか、生の無意味さだとか、死の避けられぬことだとか、来世の闇だとかいったふうな考えは、そういう高遠な考えはみな、わたしに言わせりゃ、ねえ君、老年になって、それが長いあいだの内的な労働の結果として、苦しんだあげくかちえられ、ほんとうに知的な財産になってこそ、自然でもありふさわしくもある。ようやくひとり立ちの生活を始めたばかりの若い頭脳にとっては、そういう考えはたんなる不幸ですよ！ 不幸ですよ！」とアナーニエフはくりかえして、手をふった。「わたしの考えでは、君のような年ごろに、そういう考えをするくらいなら、肩の上に頭なんかのつけてないほうがいいくらいだ。わたしはね、男爵、まじめに言ってるのですよ。もうずっと前から、一度このことについて君と話したいと思ってたんだ、というのはね、知りあった最初の日から、わたしは、君がそういうろくでもない考えにひかれているのに気がついてたんですからね！」

「ともしび」 松下裕訳 ちくま文庫 チェーホフ全集 5 (1993) 170～171 ページ

ロシア語での原文は以下を参照して下さい：

http://az.lib.ru/c/chehow_a_p/text_0070.shtml#04